

永吉天神段遺跡現地説明会資料

平成24年12月8日

県立埋蔵文化財センター

永吉天神段遺跡とは

永吉天神段遺跡は、東九州自動車道建設に伴い、平成23年度から県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行っています。

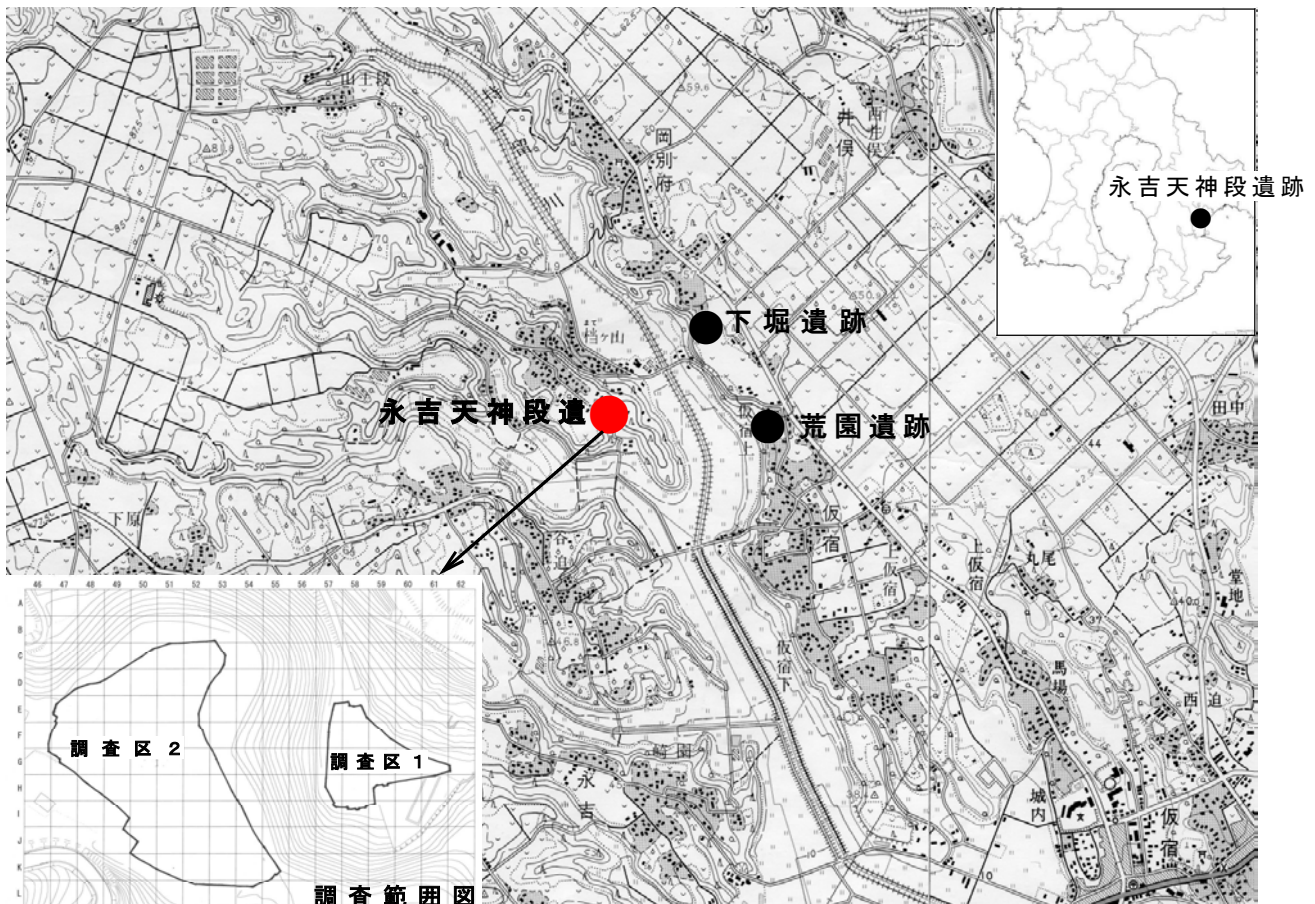
これまでに、縄文時代早期（約7,300年前）の巨大地震に伴う噴砂跡、縄文時代前期（約5,000年前）の土器・石器、弥生時代（約2,100年前）と平安時代（約1,200年前）の集落跡などが発見されました。



空から見た遺跡（矢印が調査2区）

〈遺跡の立地〉

遺跡は、大崎町永吉の^{まてがやま}档ヶ山集落に所在し、^{もちどめがわ}持留川とその支流に挟まれたシラス台地に立地しています。調査区は、標高の低い調査区1と標高の高い調査区2に分かれています。調査区1の標高は約35m、調査区2の標高は約50mです。



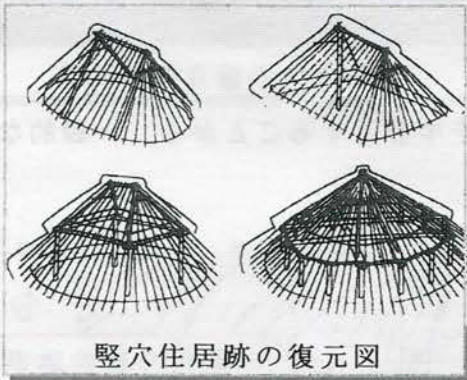
遺跡の位置（1:25,000）

【弥生時代の集落跡】

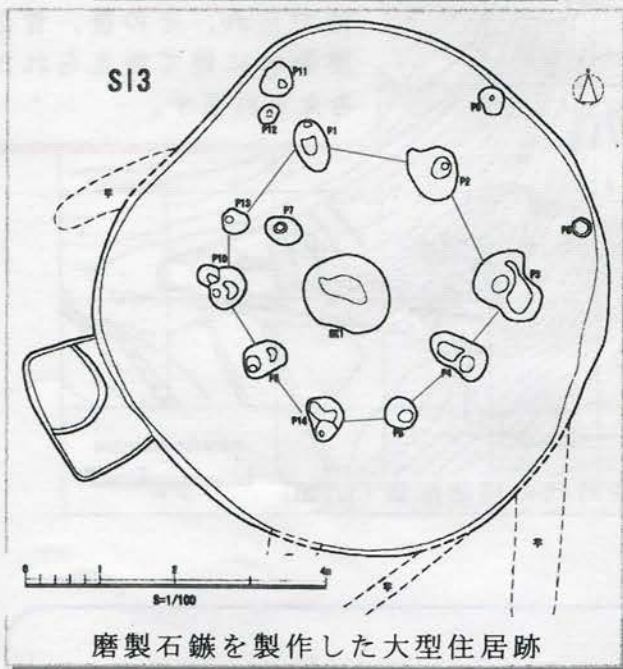
調査区2では、弥生時代中期（約2,100年前）の竪穴住居跡が20軒確認されています。この頃になると、水田稲作が始まり、住居が単独で存在するのではなく、複数集まって集落をつくるようになります。

住居跡には、面積が30㎡を超える大型の円形住居跡と20㎡未満の長方形の住居跡があります。大型の円形住居跡は、磨製石鏃の製作途中品や砥石が出土していることから、磨製石鏃の製作などを行う共同作業場の可能性があります。また、長方形の住居跡は、居住用と考えられています。

永吉の弥生集落では、大型円形住居跡1軒につき2～3軒の長方形住居跡がセットになっている可能性があります。おそらく、2～3世帯で大型住居1軒を共同管理していたものと思われ、このような集団が複数集まって集落ができた可能性があります。



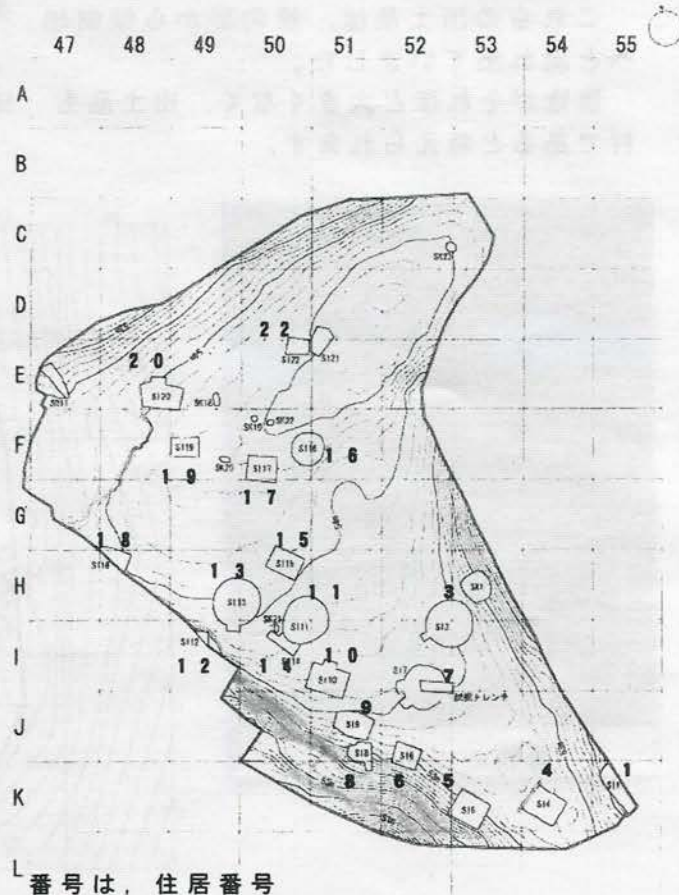
竪穴住居跡の復元図



磨製石鏃を製作した大型住居跡



長方形の住居跡 (1/100)



番号は、住居番号

弥生時代の竪穴住居配置図 (1/1,000)

～遺跡周辺の弥生集落～

永吉天神段遺跡から約700m北東に下堀遺跡があります。

下堀遺跡は、グリーンロード建設に伴って発掘調査が行われました。

場所は、県道64号線との交差点付近です。遺跡では、永吉天神段遺跡より新しい時期（約2,000年前）の大型円形住居跡のほか、多くの建物跡が発見されています。

【平安時代の集落跡】

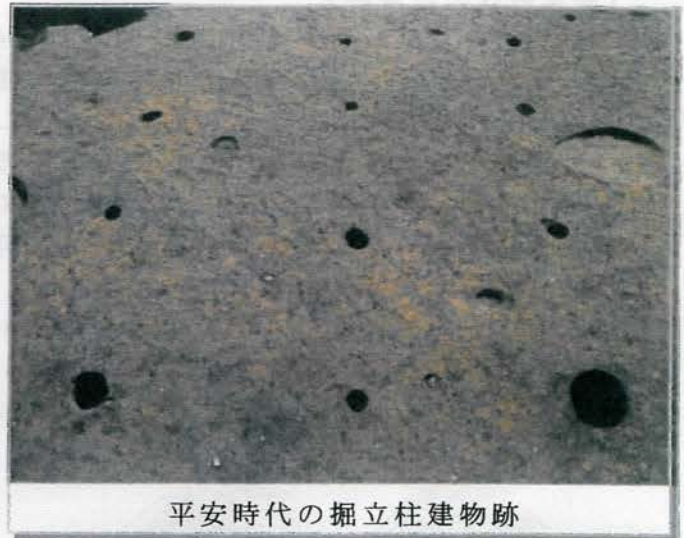
調査区1では、9世紀頃（1,200年前）の掘立柱建物跡が6棟発見されました。

建物跡は、2棟重なっていることから、建替えが1回行われています。また、建物の大きさや方向の類似性から、2～3棟が同時に建っていた可能性があります。

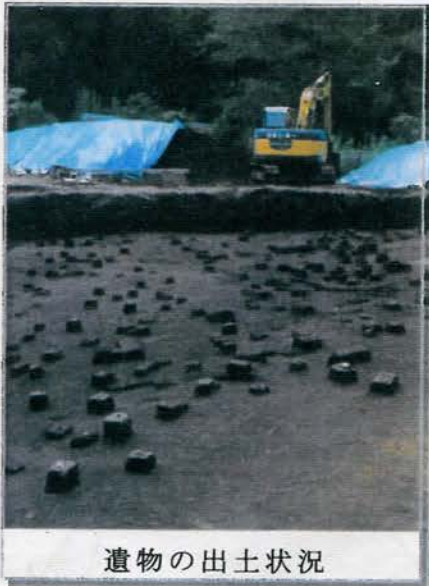
周辺では、食器として使った碗や坏、貯蔵用である須恵器の大甕、鉄製の小刀、糸を紡ぐ紡錘車、塩を運ぶ焼塩土器が出土しました。碗には、墨で漢字が書かれており、字が書ける人がいたようです。

これらの出土品は、建物跡から傾斜地へと流れ出ていました。

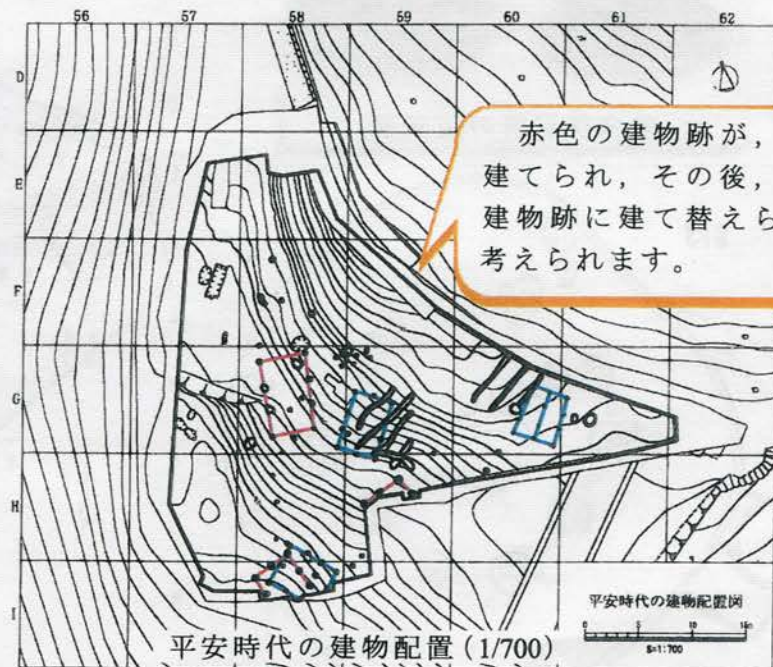
建物がそれほど大きくなく、出土品も日用品を中心とすることから、一般的な農村であると考えられます。



平安時代の掘立柱建物跡



遺物の出土状況



まとめ

これまでの調査によって、^{まてがやま} 档ヶ山地域の歴史が、縄文時代前期（約5,000年前）までさかのぼることが分かりました。

今後、調査を進めていけば、縄文時代早期（約7,000～10,000年前）や、もっと古い旧石器時代の生活跡が発見される可能性があります。

遺跡は、地域を知る重要な遺産なので慎重に調査を行い、この地域の歴史を明らかにしていきたいと思えます。